

## 書 評

田代博著：『世界の「富士山」』新日本出版社  
2012年6月刊, 190p., 1,600円(税別)

お笑いコンビのサンドウィッチマンが経営する「全世界トラベル社」が企画する旅行ツアーを紹介するという形で進行するNHK高校講座地理に、同社のコンサルタントとして(時にはケッペンに扮して)しばしば登場する著者をご覧になった読者も多いのではないかと。また著者は充実したホームページを開設しているので、こちらをご覧になった読者も多いだろう。このホームページを拝見すると、著者の地理に対する思い、特に富士山に対する熱い思いが伝わってくる。本書はこの著者による、『今日はなんの日、富士山の日』(新日本出版社、2009年)等に続く、「富士山もの」の最新刊である。

本書は、書名からわかるように日本の富士山ではなく、世界で日系人や日本人旅行者に「〇〇富士」と呼ばれている山々を54座集め、ひとつの山につき数ページを費やして説明したものである。山の概要に加え、それぞれの山ごとにその山の特徴を理解できるように工夫して説明が行われている。本書で取り上げる山の位置と識別番号を示した世界地図がはじめに示されているが、各山の説明を行っているページには、その山の位置が国や地域のどのあたりにあるのかわかる縮尺の地図が別途ついている。また少なくとも1枚、山によっては数枚の写真(モノクロ)もあり、巻頭にはカラー写真が16枚あるので、こうした写真を眺めているだけでも楽しい。確かに日本の富士山にそっくりの形をした山もあるが、これがどうして「〇〇富士」となるのかという思いを抱くものも多い。見る角度を変えればもっと富士山らしくみえるの

かもしれないが、もしかすると、後述するように「望郷の念」の強さがなせる技という側面があるのかもしれない。

本書は4つの章からなっている。世界にちらばる山々を紹介するので、一般的な地域区分を用いて章に分けたのが第2章から第4章にあたる。第2章の「アジアの富士山」では19座、第3章の「ヨーロッパ・ロシアの富士山」では11座、第4章の「南北アメリカ・オセアニアの富士山」では19座が取り上げられている。そして本書の最大の特徴といえる第1章の「望郷の富士山」には5座があてられている。この第1章のねらいは以下の通りである。すなわち「〇〇富士」と呼ばれるということは、その地に移住として渡った日本人が多い、あるいは太平洋戦争中多くの日本人がその地に兵士として駆り出されたということでもある。こうした人々が富士山に似た山をみて故郷に思いを寄せ、「〇〇富士」という名称がついたわけである。つまり世界にちらばる「〇〇富士」の存在は、今日の旅行者も含めて日本とのつながりの深い場所が世界の各所に存在していることを表している。そうした山々の中で、特につなりの強い5座を第1章で取り上げている。

順当な結果と言うべきだろうが、本書で取り上げられている54座のうち、38座は成層火山と分類されている。また54座のうち標高がもっとも高いものは6439m(アンデス山脈にあるイリマニ山、「ボリビア富士」)、もっとも低いものは22m(パプアニューギニアのニューブリテン島にあるタブルブル山、「ラバウル富士」となっている。6000m峰(6000~6999m)は1座、5000m峰は6座、4000m峰は2座、日本の富士山も該当する3000m峰は10座、2000m峰は11座、1000m峰

も11座、1000mに満たないものは13座含まれている。なお54座のほかに、「〇〇富士」の候補としたがそのようにみならず根拠が弱いとして掲載を見送った5座について、第2～4章のコラムでそれぞれ紹介している。

著者が一番力を入れたと思われる第1章で取り上げた5座については、第2章以降での説明に比べ、各山の説明に多めの紙幅を割いている。たとえばアメリカ合衆国ワシントン州にあるレーニア山(タコマ富士)では、山の概要説明に加え太平洋戦争時に行われた日系人の強制収用に関する説明や、現在富士山とレーニア山が「姉妹山」になっていることから始まった「富士山・レーニア山教育交流プロジェクト」についての紹介も行っている。このように特に日本との関係が強い山々が別格として第1章で取り上げられているのである。

第2章以降では、各章のはじめに「概説」として各地域における山の分布や、各地域と日本との関係についての簡単な説明を行っている。この説明を読むことで、各章で取り上げた「〇〇富士」の多寡や地域内の偏りの存在を理解することができる。たとえば第2章「アジアの富士山」で取り上げた19座のうち台湾にあるものは6座と比較的多いのだが、その理由を地形と日本との関係に求めている。すなわち台湾には山が多いこと(3000m以上の山が約130座あるとしている)、また日本による統治の時代があった影響で「〇〇富士」が多くなる素地があったとしている。第3章と第4章でも同様の説明があるので、各地域の個別の山の説明を読む前の導入として「概説」に目を通すとよいだろう。

世界地誌に詳しい人ならば該当しないが、本書を通読すると、意外なところで日本との関係が存在している、あるいは存在していたことを教えられる。たとえば、スペインのカナリア諸島が日本の遠洋漁業の基地になっていること(第3章、テ

イデ山、「カナリア富士」)や、アラスカ州南東部シトカではかつてサケやイクラ加工業に従事する日本人が多く住んでいたこと(第4章、エッジカム山、「シトカ富士」)などである。また、太平洋戦争時に日本とのつながりの深かった場所が各地に存在していたことも再認識させられる。千島列島のマトゥア島(松輪島)には旧日本軍の飛行場があったこと(第3章、サリチェフ山、「松輪富士」)や、フィリピンのルソン島にあるアラヤット山の麓にある旧マバラカット基地が太平洋戦争における初めての特攻作戦の出撃基地になったこと(第2章、アラヤット山、「マニラ富士」)などである。このマニラ富士を本土の富士山と重ね合わせて若き航空兵が出撃していったことであろうという記述には、戦後長い時間がたった今でも悲しいものがある。

本書の最後は、章番号のつかない追加的な記述の部分になっているが、著者としてはやはり最後に日本の富士山に触れずにはいられないという内容の記述になっている。著者ほどに富士山に思い入れのない評者でも、やはり富士山は特別な山だという思いがある。大学時代に山岳部に所属していたこともあり、その後もほぼほとと山歩きを続けているが、どこの山を歩いていても遠くに富士山を認めると、「富士山が見えた」という思いが湧いてくる。8年間余り海外で生活した後に帰国した時に、機上から夕焼けを背にした富士山を遠方に認めた時は、「日本に帰ってきた」ということを実感した。多くの日本人にとって、こうした思いは共通するものではないだろうか。このように考えると、海外で生活した、あるいは本土から離れて戦った日本人が身近にある山に本土の富士山を重ねた気持ちも、少しわかるような気がするのである。

最後に評者の個人的な感想では、本書で取り上げられた54座の写真で見ると、「ニュージーラ

ンド富士」のひとつとして紹介されたナウルホエ山の写真が、山梨県側からみた富士山にそっくりだと感じた。読者の皆さんはどの富士が、本家によく似たものとお考えになるだろうか。

(高橋重雄)

伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比古・林 琢也・鈴木晃志郎編：『役に立つ地理学』古今書院，2012年4月刊，162p.，2,600円（税別）

「地理学者はいまだ、そう名乗るたびに県庁所在地を問われ、地理学と高校地理の違いについて説明を求められている」というまえがきの記述に、苦笑を浮かべつつも思わずうなずき、やがて小さなため息をつく。本書を読み始めた評者自身の顔を想像してみると、おおよそこんなところだろう。とはいえ、地理学を専攻した方々ならきっと誰でも、似たような表情を浮かべてしまうのではなからうか。本書は、このような状態を何とか打破しようと立ち上がった、編著者5人の若手地理学者をはじめとする研究者たちによる力作である。

本書は、2部構成の形式を取る。第1部では、8人の若手地理学者らが、自らの研究を事例として専門とする地理学分野について紹介し、それが社会の様々な問題にどのように寄与しうるかを議論する。第2部では、5人の他分野の研究者らが自身の研究分野の視点や方法、研究成果などについて述べた上で、これらに対して地理学はどのようなアプローチが可能であるのか、あるいは、地理学からどのような分析・提言がなされることを期待するか、といった内容が記される。

第1部の「第1章 地図学者からのアプローチ」では、地図は単なる現実世界の描写にとどまらず、作り手の価値観やメッセージが色濃く反映さ

れたものであることが指摘される。広島県福山市鞆の浦では、港まわりの埋立架橋をめぐる、日常生活の利便性向上を求める賛成派と、観光名所としての景観保全を求める反対派が対立した。そこで著者は、GISを援用して鞆の浦に関する複数の観光案内図を分析した結果、観光案内図に描かれる場所は鞆の浦の特定地域に集中していた。すなわち、架橋問題が発生している港まわりが観光圏として認知・描写され、それ以外の場所は地図から外されていた。このように、地図の分析を通じて、作り手の意図や地理的な駆け引きを明らかにできることが示されている。

「第2章 経済地理学者からのアプローチ」では、サービス産業の成長と経済のグローバル化の空間的展開について、労働者派遣業の発展を事例に論述される。労働者派遣業は、その全国的拡大とともに、様々な案件に対応できるよう、次第に専門職派遣から非中核労働者の派遣へと比重を移していき、これとともに地域の労働市場では正規雇用から非正規雇用への転換が進んだ。また、労働者派遣企業の拠点となる事業所は、企業イメージ向上のために都市の最新鋭の高層ビルに置かれる傾向にあった。個々人の生活や意思決定、企業の動向は複雑であるが、その一般的特徴を見出すとともに、経済的な合理性だけは説明しがたい部分を、空間的な制約に関する考察を通じて解明することの重要性を著者は指摘する。

「第3章 商業地理学者からのアプローチ」では、スーパー等の大型商業施設（大型店）の立地動向がどのように変化し、地域経済に影響をもたらすのかについて述べられる。経営や流通システムの変化、また政策や都市構造の変化を受けて、都市の中心市街地に集中していた大型店は次第に周辺市街地へと移動した。これにより、地域には複数の商業集積が形成され、消費行動も郊外に拡散するという都市空間の変化が起こった。今後は、

他の研究分野の知見もふまえて、条件の異なる様々な地域において、商業が人々の生活にもたらす影響や社会的意義を見直し、かつ見出すことが重要であると著者は強調する。

「第4章 都市地理学者からのアプローチ」では、ジェンダーの視点を導入しながら、東京圏における居住地選択からみた都市構造の変化が示される。居住地選択には、世帯のライフステージの進行が大きく影響するが、従来注目されていた夫(男性)の意思決定だけでなく、自宅近隣の認識の高さや地元への愛着の強い妻(女性)による意志も反映されており、夫婦の性的役割分業が郊外部での居住地選択に密接に関わっていることが示された。今後は、シングル女性や共働き世帯など、世帯構成が一層多様化することが見込まれ、彼(女)らの意思決定によって都市構造はさらに変化することが予期されている。

「第5章 観光地理学者からのアプローチ」では、近年、社会的関心が高まる観光について、伝統的建造物群保存地区の町並み保存活動を事例に論考される。ここでは、様々な社会的立場のせめぎあいによって場所の意味が構築され続ける構築主義、マンションなどの高層建造物と歴史的建造物が混在する景観問題、文化遺産が持つ本物の芸術性や歴史的価値を維持するオーセンティシティ(真正性)の問題など、様々な課題が存在する。また、観光を単なる物見遊山で終わらせるのではなく、地域の特性や伝統を住民も観光客も生かしたオルタナティブ・ツーリズムとして発展させようとする動きもある。身近な地域の魅力発見や地域資源の活用は、今後一層重視されることが予期され、現地での詳細なフィールドワークを得意とする地理学が果たす役割は大きいと著者は期待する。

「第6章 行動地理学者からのアプローチ」では、人間の移動や行動パターンと空間利用の関係

が述べられる。著者が実施した上野動物園を対象とした調査からは、来園者の属性によって園内を巡る行動には差異がみられ、空間の利用の仕方が異なることが見いだされた。さらに、多摩動物園との比較によって、来園者の属性が上野動物園の場合と同じであっても、場所が異なれば行動の特徴にも差異が生じることが示された。これらの知見を、インフラ整備や情報提供の方法等に関する政策立案などにも応用できる可能性が指摘されている。

「第7章 農村地理学者からのアプローチ」では、農産物や農村景観を観光資源とした地域振興のあり方について論述される。日本有数のサクランボ産地である山形県寒河江市においては、既存の流通システムと、アグリ・ツーリズムによる観光農園や直売などの市場外流通が両立され、産地が維持されている。この背景には、組合による組織的な観光客対応や、栽培技術の継承・共有による高品質なサクランボ生産がある。これにより、地域内に居住する農家の合意形成が生まれることで、良好な農村環境というイメージが演出・商品化されるプロセスが、現地でのフィールドワークによって明らかにされている。

「第8章 歴史地理学者からのアプローチ」では、過去の自然環境や景観の復原だけでなく、過去の様々な災害(歴史災害)を復原することで、今後の災害予測に結びつける視点が提示される。例えば、1703年元禄関東地震について、海岸段丘や海岸侵食の調査や、古文書・絵図などの史料および現在の地形図をもとにした分析の結果、地震による地形の変動や、それによる人々の生活への大きな影響が明らかにされた。東日本大震災発生以降、大地震や津波への対策が全国各地で検討されるなかで、本章の分析手法は早急に社会還元されるべきであろう。

第2部では、まず「第9章 生物学からみた地理

学]において、生命現象を直接引き起こす物理的・化学的メカニズム(至近要因)や、生物の進化そのものの究極的・根源的なメカニズム(究極要因)を分析する生物学の視点が示される。こうした変化や多様性の起源を解明する視点は、生物学にも地理学にも共通すると著者は指摘する。また、人間の活動や意思決定に影響を受ける生命現象の解明は生物学のみでは困難であり、地理学をはじめとする社会科学的手法との融合が重視されている。なお、本章の冒頭では、自然科学全般に関する簡潔な紹介が記されており、第1部の(人文)地理学に関する記述から頭を切り替えることができる。

「第10章 土壌学からみた地理学」では、近代土壌学において、土壌が気候や植生の影響を受けて生成されるという概念が提示され、この背景には地理学的考察が加味されたことが記される。その後も土壌の分類法は現在に至るまで精緻に議論され続けているが、自然資源の利用など、人間の諸活動と土壌との関係性を分析するうえでは、農地などの土地利用に関する意思決定の影響や、土壌の空間的な広がりに関するGISによる大容量データベースの構築・活用といった地理学的視点の導入が、今後も重要であることが述べられる。

「第11章 環境倫理学からみた地理学」では、環境問題に対する人間社会の倫理観について、いくつかの主たる論争が冒頭で紹介される。こうした論争は決着をみるにはいたっておらず、その諸相は例えば、地域の風土や場所、景観などに対して様々な価値観が存在することからも明らかである。この状況に対して、その地域に関係する人々の「合意形成」を助ける上で、地域を丹念に調査・分析する地理学の重要性が強調される。ただし現時点では、こうした現場に地理学者が欠落している(あるいは、存在感が薄い)という手厳しい指摘も記されている。

「第12章 環境経済学からみた地理学」では、これまでの環境経済学において、前提とされる市場取引に環境問題による影響が含まれないという外部性の問題や、環境問題を社会的費用として公正な負担を検討する議論などがなされたことが述べられる。その上で、環境問題には「問題の多義性」と「方法論の多義性」という2つの課題が存在し、学際的なアプローチが常に必要であることが指摘される。著者が関心を向ける水問題の場合、地理学は先駆的に実態研究を積み重ね、環境経済学の発展にも寄与したが、一方で法制度を介した人間と自然との関係についての言及は少ない。過去の環境問題や環境政策を地理学の視点から検討し直すことなどを通じて、双方の学問の接近が重視されている。

「第13章 法律実務家(紛争解決分野)からみた地理学」では、社会において自由や権利が保障されているほど意見の相違や利害の対立が生じ、紛争の発生とその解決が求められることが記される。著者は、ナラティブ・アプローチの観点から、個人が自己の物語を持ち、その危機の克服を手助けすることが紛争解決であるとする。そのためには、紛争をめぐる場所や空間に関する理解が必須であり、人々の置かれた環境や経済、文化、生活などの様々な状況に関連する地理的要因の分析が重視される。その上で、具体的な紛争解決の事例が挙げられ、その1つ1つで地理学が寄与する項目について詳細に列記されている。

第2部の論考は、地理学を専門とする研究者にとって新鮮な指摘であり、示唆に富む。それゆえに、異なる専門分野に属する研究者が自身の研究と地理学との接点を模索し、それを読者にわかりやすく記述するという作業には、ときに頭を悩ませることがあったかもしれない。そうした難題をクリアし、本書のオリジナリティを大きく引き上げた第2部の5人の著者たちに、評者も一地理学

者として敬意を表したい。

なお、上記のほか、第3・5・8・13章にはコラムも存在し、それぞれの分野における最近の動向などに関する平易な説明がなされ、関心を一層喚起させる。

一方で、2点ほど評者からの注文も記しておきたい。1点目は、編著者らもまえがきで触れていることではあるが、地理学からのアプローチの中に自然地理学者からの論考が存在しないことである。他分野からのアプローチには、生物学や土壌学、環境問題を主に扱う研究テーマが多いことを考えれば、これらの研究分野との関連性が人文地理学と同等以上に高いと思われる自然地理学者からのアプローチがやはり欲しかった。

2点目は、他分野からのアプローチを受けて、地理学がなしうることは何なのか、他分野と共通する問題の所在はいかなるものか、といった事柄について、最後の論点整理が欲しかった。他分野からのアプローチを読み進めるにつれ、それらの研究分野の魅力が次々と伝わってくると同時に、こうした研究諸分野に地理学はかくも多くの示唆や貢献を与えることができるのか、という驚きや高揚感を覚えずにはいられない。この熱が冷めないうちに、編著者によるもう一押しがあれば、本書から得られる知見は一層まとまったものになったように思える。尤もこれは、論点整理を読者自身が行ってこそ、という編著者らの期待や熱望によって、あえて記されていないのかもしれない。

いずれにせよ、評者によるこれらの注文は本書の価値をいささかも損なうものではない。むしろ本書で取り上げられた地理学研究の動向は、いずれも新鮮な内容であるがゆえに、論述に対する異なる視点の提示や詳細な意図を正したい地理学者も少なからず存在するかもしれない。しかし、専ら地理学のなかで本書を批評することは、本書の意図とは異なるし、本書が目指す高見を遠ざける

ことにすらなりかねない。むしろ、一人でも多くの他分野の研究者へ本書を紹介し、こうした研究者に地理学の存在を再確認してもらうこと、そして分野をまたいだ研究プロジェクトを1つでも多く作り出していくことこそが重要であろう。そして、この動きによって、編著者らの優れた能力が一層引き出されることが期待される。ぜひ一読をお勧めするだけでなく、読後は本書の存在を知らない地理学以外の方々にお声かけいただくところまでを切望する一冊である。

(淡野寧彦)

平岡昭利著：『アホウドリと「帝国」日本の拡大』  
明石書店、2012年11月刊、279p.、6,000円(税別)

地理学のロマンとは何だろうか。中学校や高等学校の地理教科書や地図帳をながめていると、日本の領域が、国土面積に比して東西にも南北にも広がっていることに気づく。評者も小学生の時分、日本の領域を地図上で着色して、日本が予想以上に拡がりをもつ国であることに驚いたものだ。さらには大日本帝国の領域を現在の日本の領域と重ねたとき、日本(人)はどうして、これらの地域に進出(侵略というべきかもしれない)していったのか、不思議に思った記憶がつい先日のごとくのようによみがえる。鳥島の名称がアホウドリに由来することは認識していたが、最東端の南鳥島、最南端の沖ノ鳥島をはじめ、「鳥島」系の名称をもつ離島が数多くあることに疑問をさしはさむことはなかった。

評者がもし地理学のロマンを問われたならば、迷わず「探検」と答えるだろう。未知なる土地(テラ・インコグニタ)を求めて、海洋にあるいは内陸部へと探検を進めた人間の探究心、冒険心こそが地理学の原点にあるのだと思う。それはしばし

ば経済的な欲望に支配されたものではあるが…。

本書の魅力はまさに、地理学のロマンであり地理学の原点ともいえる未知なる土地への探究を詳細かつ実証的に描きだしたところにある。そしてその行動の背後にある人間の欲望を検証することに成功している。太平洋を南へ東へと乗り出し、新たなる無人島を獲得していった人々の行為により、近代における「帝国」日本の領土拡大が図られていったが、その背後にはアホウドリをはじめとする鳥類獲得による経済的利益への欲望があり、こうした「ゴールド・ラッシュ」ならぬ「バード・ラッシュ」が未知なる土地への探検の重要な動機として描き出されている。

本書は全体で4部から構成されている。簡単に内容紹介をしていこう。第I部では、明治以降の日本人による無人島探検から、「帝国」日本の領土拡大について論じたものである。アホウドリなどの鳥類捕獲が巨利をもたらす資源であると認識した人々による南洋進出について実証を試みたものである。

例えば、日本の最東端として知られる南鳥島は、明治期に日本人が広くアホウドリなどの鳥類を求めて、南洋の島々に展開するなかで、開拓・領有化が進められたものであり、さらには、島ばかりではなくグアノ（鳥糞）やリン鉱に着目する契機となり、南鳥島は日本で最初のリン鉱採掘の島となったことが指摘される。一方でいずれの資源も島の狭小性から枯渇が早く、さらなる資源を有する島を求めて南進を続ける人々の行動は空間的に拡大し、日本の領土を超えて南洋の島々へと向かったことが明らかにされた。

近隣諸国との領土をめぐる係争がメディアを賑わす昨今において、3章でとりあげられる尖閣諸島にかかわる論考はとくに興味深いだろう。ここでは尖閣諸島への日本人の進出について、沖縄県による調査（1885年）から1895年の日本の領有の

確定、その後の古賀新四郎の進出から古賀村の消滅までの展開が分析される。無数ともいえるアホウドリの群棲が注目され、日本の領有以前に多くの日本人がアホウドリおよびヤコウガイの採取を目的に渡航していたこと、アホウドリから始まった古賀による尖閣諸島での事業は、カツオ漁業と海産物、鳥糞の採取や農業、鳥類のはく製業と多角化が進められ、莫大な利益を上げたものの、大半の事業が資源略奪型の生産であり、かなりの資本投下により尖閣諸島に建設された古賀村も、30数年で消滅したことが明らかにされた。

このような無人島探検から日本の領土拡大の一端が、アホウドリ捕獲事業と密接に結びついていることが第1部では検証にされる。また1) 榎本武揚や志賀重昂ら南進論者の主張や冒険的な海洋小説の流行ともあいまって、南洋ブームの火付け役ともなったこと、2) こうした社会思潮に加えて、当時の地図や水路誌には数多くの疑存島が記載されており、アホウドリなどの鳥類捕獲が莫大な利益と結び付くことを認識した人々は、競って疑存島の探検に乗り出し、結果的に南鳥島の発見・領有につながったこと、3) 疑存島の「先願」あるいは「先占」が島の権利を生じさせることから権利獲得競争の一面をもっていたことが史資料をつぶさに検討することにより、実証的に示されている。こうした一攫千金をまくろむ山師的な人々の行動が、結果的に「帝国」日本の領域を東へ南へと拡大したことが明らかにされるのである。

こうした日本人による太平洋への進出は、「帝国」日本の領域を超えさらなる拡大を示していたことが第2部で論じられる。

明治期、鳥類を追った日本人の太平洋進出は、空間的にも拡大を続け、1897（明治30）年前後には遠く北西ハワイ諸島にまで達した。このような日本人の太平洋進出を著者は「バード・ラッシュ」と定義した。アホウドリの羽毛や鳥類のはく製

がヨーロッパで市場価値を有することが知られると、鳥の生息地である無人島獲得に血眼になった。鳥の宝庫であった北西ハワイ諸島には多くの日本人が進出し、危機感を持ったアメリカ合衆国政府は日本人の侵入を阻止するために、ルーズベルト大統領は20世紀初頭に鳥類捕獲禁止令を出し、ハワイ諸島鳥類保護地域を設定した。日本人のバード・ラッシュの背景には、日本政府による遠洋漁業奨励法をはじめとする多額の助成金があり、これらを利用して遠洋漁業よりも利益の大きい鳥類捕獲に人々が従事したこと、その結果多くの出稼ぎ労働者が組織的に南洋群島に派遣されたが、水や食料などの生活基盤に乏しい無人島では、ときに漂流者と同様の環境におかれ、生命の危険が高く多くの日本人が死亡したことがみえてくる。こうした事故・事件は鳥類捕獲が密漁の性格を帯びていたこともあり、伝承されることなく歴史のなかで忘却されつつあり、本書によって貴重な日本近代史の裏面が明らかにされたともいえる。

第3部では、アホウドリなどを追った日本人の行動は、鳥類の減少に伴い、さらなる島々を求め空間的にも拡大し、無人島獲得競争が激しさを増していく様態が明らかにされる。1885年に沖縄県の探検によって日本領となった南・北大東島、1900年に水谷新六らの探検によって領土化したラサ島（沖大東島）では開墾計画が作成され、農業労働者の移住が進められたが南大東島のサトウキビ栽培を除くと困難を極めた。無人島への進出目的は、1905年以降アホウドリなどの鳥類に加え、グアノ・リン鉱が加わり大きく転換する。ラサ島では激しい借地権獲得競争がなされたが、リン鉱資源が枯渇すると、新たな島々を目指す行動が繰り返され、1918年にはスプラトリー（南沙）諸島への進出がなされた。こうした無人島進出の動きは、次第に企業行動としての性格を帯びるよ

うになる。南北大東島は東洋製糖による独占資本のプランテーション経営のもと、サトウキビの生産が行われるが、労働者は小作農と規定され、以後大きな土地問題を抱え込むことになった。

このように太平洋の島々に拡大された日本人の行動は、1905年ころから次第にグアノ・リン鉱が主目的となっていく。第4部では、重量のあるこれらの採取・採掘は、多くの労働者や運搬に耐えるトロッコや大型汽船を必要とするものであり、必然的に企業的な資本投下がなされてきたこと、さらにリン鉱が軍事的に有用な資源となるにつれて、南洋諸島への武力進出に至ったことが論じられる。1895年には日清戦争の結果、台湾・澎湖列島が日本領土とされ、外地へと進出が進められる。一攫千金を狙った日本人による進出はさらに拍車がかかり、第4部では台湾島北部の無人島への借地申請や東沙（プラタス）島での企業島建設と領土化した問題について分析された。1914年の第一次世界大戦時には、海軍は南洋群島に進出するが、アンガウル島のリン鉱の重要性を認識していた海軍と大手商社などが結びつき南洋経営組合が設立され、同島のリン鉱採掘に着手した。その後同島のリン鉱採掘事業は高度な政治的判断により民間から海軍直営となったことなど、武力進出からリン鉱争奪の顛末が明らかにされた。

さて、本書のもつ豊富な内容の一端を紹介するだけで、与えられた紙幅を超えてしまった。評者の能力不足をお詫びするとともに、最後にコメントを付しておきたい。本書の魅力は何よりも、著者の発想・構想力に基づいた近代日本における地理的事実の実証的解明にある。アホウドリ捕獲を帝国日本の推進力とする「アホウドリ史観」のロマンはもちろん本書の魅力であるが、残念ながらアホウドリは本書の主役ではない。本書の魅力は著者の生涯を通しての疑問や仮説を、現地での聞きとりや観察を繰り返しながら、一つの物語を紡

いでいくこうした著者の地理学者としての態度そのものにあると言えるだろう。

本書「おわりに」に本書執筆の動機が示されている。南北大東島では、防風林の内側にドーナツ状に広がる土地条件の良い地域に専従の八丈島系島民が居住していた。八丈島の人々が、どうして南西にはるか離れた大東島に住んでいるのか、彼らはなぜ命がけでこの島の断崖をよじ登ったのか。また尖閣諸島や南鳥島など、人間の居住が不可能と思われる島々に、日本人はどうして進出したのか。40年来の疑問を原点にフィールドワークや文献を積み重ねながら、その解決をはかった本書は本当に充実した読後感を与えてくれる。フィールドワークの面白さとそれを裏打ちする文献史資料の説得性は、類書の追従を許さないであろう。

本書で分析の対象とされた島々は、少々オーバーな表現をお許しいただけるならば、太平洋上に浮かぶ絶海の孤島である。絶海の孤島という最も人類の居住から隔絶された離島と人類から隔絶

されているがゆえにアホウドリの楽園が築かれ、その結果人類の到達・収奪がもたらされた近代史の一面を本書は余すところなく伝えてくれる。周知のように著者は離島研究の第一人者として知られているが、本書はそのライフワークの成果として珠玉の「作品」ともいえるだろう。本書を手にとられる方は、世界地図もしくは地球儀を手元におきながら読まれるとよい。学術書・専門書であるが、わくわくしながら読み進めることができるだろう。願わくは本書を骨子とする普及書が著者の手によって出版されるならば、地理関係以外にも広く読まれることであろう。

(松井圭介)

## 文 献

- 平岡昭利ほか編(1997～2006)：『地図で読む百年 全10冊』古今書院。  
 平岡昭利編著(2003～2010)：『離島研究 I～IV』海青社。  
 平岡昭利編(2009)：『離島に吹く新しい風』海青社。